

以下は小島衣料のミャンマー現社員からの情報を、小島正憲がまとめ直したもの。

小島正憲

1. ミャンマー経済「開国前夜」

ミャンマー政府が民主化への姿勢を見せ始めたことから、欧米の経済制裁が解除の方向に大きく動き始めた。それを先取りするかのように、日本を含む欧米各国の企業が、現在、怒濤のようにミャンマーに殺到している。目下の所、現地の日系企業には、視察団が相次いで訪れるため、工場などの作業に支障が出る有様にもなっている。もともと、主要なホテルは1か月後まで満杯であり、急に視察を計画しても、宿泊先もままならないような状況である。

- 4月に行われる予定の総選挙に向けて、欧米各国はミャンマー政府に、経済制裁の完全解除、教育面での支援、ビザ発給緩和などをちらつかせながら、政治犯のさらなる釈放、総選挙への監視団の受け入れなどを迫っている。政府側の妥協があれば、さらに欧米各国からの経済援助なども期待でき、結果として、さらに「経済開国」が進む可能性が出てくる。
- 政府は、2013年にネピドーで開催予定の「東南アジアスポーツ大会(事実上のASEAN五輪)」、2014年のASEAN議長国就任までに、一定の“民主化”を進め、外資を大幅に導入することによって、政権と民生の安定を目指している。
- ヤンゴンの市街地、工業団地などにおける電力事情が改善され、ほぼ無停電状態になった。停電しても5~10分間程度であり、長時間停電の場合は事前通告が新聞などに出るようになった。事故などで緊急停電の場合、電話での問い合わせに、当局が正確な返事をするようになった。現在、中国の援助によるゴミ発電所、天然ガス発電所などが計画されている。
- 政府の昨年秋の中古車の輸入規制緩和策によって、中古車の価格が半値になった。ミャンマーでは日本車の人気が高く、日本への中古車の買い付けも多くなっている。また新車の規制緩和も検討されているようなので、日系各社も具体的な進出策に着手している。
- 昨今のミャンマー情勢の変化は、すでにミャンマーへ進出済みの日系企業にとって、メリットとデメリットの両面をもたらしている。輸出税の減額や電力事情の大幅改善などがメリットとなる一方、デメリットとして、怒濤のようになだれ込んでくる外資企業によって、それまで安定していた労働力の需給バランスが崩れ、賃金が大幅にアップしてきたからである。
- ミャンマーには、公定レート(1US\$ = 5.5チャット)と闇レート(1US\$ = 約700チャット)の乖離があり、さらに外貨兌換券などの流通問題を含めて、解決しなければならない難問が山積している。ちなみに闇レートは1300チャットまで行き、現在はチャット高傾向。
- ミャンマーのテイン・セイン大統領は、昨年5月に北京を訪れ、胡錦濤国家主席と会談し、中国の支持を取り付けた。また中国側も、原油・天然ガスを輸送するパイプライン建設、水力発電ダム建設とその買電などについて、ミャンマー側と合意した。昨年10月、テイン・セイン大統領は、インドのニューデリーを訪れ、シン大統領と会談した。両国は国境貿易をより盛んにさせる陸海輸送路の整備と、天然ガスパイプライン建設計画の速度を上げることなど、関係を強化することで合意し、インド政府は5億ドルの追加支援を行う考えを表明した。昨年11月、米国のクリントン国務長官は、国務長官としては50年振りにミャンマーに訪問、テイン・セイン大統領と会談し、政治犯の釈放や少数民族との和解など、さらなる民主化の推進を迫った。日本は昨年12月、玄葉外相がミャンマーを訪問、スーチーさんと会談、民主化が前進するのを条件に ODA 再開の交渉に入りたいとの方針を示した。また今年1月、枝野経産相がミャンマーを訪問、官民の経済関係者、スーチーさんら、テイン・セイン大統領を始めとする経済閣僚などと会談し、経済支援策について協議した。ミャンマー政権は、従来の中国一辺倒の外交姿勢を、全方位外交に切り替えた模様である。

2. 2011年9月30日、ミャンマー政府、「中国と共同建設中の巨大ダム・中断」表明

ミャンマーのテイン・セイン大統領は、9/30、北部カチン州のイラワジ川上流に中国と共同建設中の水力発電用ダム「ミッソングダム」の工事を中断すると発表した。スーチーさんらは数か月前から、イラワジ川上流で進む中国資本の巨大な複数ダム建設プロジェクトに対して、「環境破壊をもたらし、少数民族とミャンマー政府との対立を激化させるもの」として、ダム建設の停止を呼びかけていた。

イラワジ川は、ヒマラヤ山脈南端を水源とし、ミャンマーの中央部を南北に縦断する大河である。流域は41万1000平方キロ、全長は2170キロ、多くの住民がこの河を用水、物資運搬、移動のための運河として利用し、神聖視している。このイラワジ川に建設する予定のミッソングダムは、最大出力が原子力発電所6基分相当の600万キロワットに達する巨大発電事業であり、2006年に中国と共同建設に合意、昨年工事が開始された。総事業費は36億ドル(約2800億円)に上り、発電電力の9割を中国に輸出する計画であった。なお中国がミャンマー北部で建設予定のダムは9か所であり、

そのうち7か所は少数民族カチン族の地域である。

ミャンマー北部カチン州には、少数民族カチン族90万人ほどが住んでおり、伝統的な先住民族として、ミャンマー政府の統治を受けない自治を強く要求している。カチン族は、反政府組織「カチン独立機構(KIO)」のもとに、カチン独立軍を擁している。しかしカチン族はミャンマー政府と、1993年に和平協定を結び、以来17年間、表だつた紛争を避けてきた。ところが一昨年来、カチン族を度外視したミャンマー政府と中国との取り決めによるダム建設が始まり、カチン族の権益や聖域が一方向的に侵されることになった。建設開始後、中国人労働者が大量に現地に送り込まれ、なおかつダムで水没する住民1万2千人の移住について、十分な保障がなされず、カチン族のミャンマー政府と中国に対する不満が爆発寸前となった。17年間の停戦状態が、このダム建設強行によって、打ち破られてしまったのである。昨年6月には、ミャンマー政府軍とカチン独立軍との間で、激しい戦闘が起き、多くの住民が中国側に越境難民化した。ミャンマー政府軍は、ダム建設に反対し妨害活動を行う勢力を一掃する戦闘であると主張しているが、それは「ダム計画防衛」を名目にして、カチン独立軍を掃討するのが狙いだとも読める行為である。「中国の巨大ダム建設計画」は、ミャンマー政府と少数民族との溝をさらに大きくしてしまった。

カチン族は、ダム建設について、ほとんど協議の輪の外に置かれていた。土地帰属、電力収益配分、住民保障、環境保全、**埋蔵資源保存**、労働力の地元需要、など多くの問題が未解決であり、カチン族は、ミャンマー政府と中国が利益を山分けするようなダム建設の構図に、武装闘争で応えようとしたものとも考えられる。

※このような構図は、中国の資源獲得戦略によって、アフリカ諸国で引き起こされている紛争事例にも適用できるのではないだろうか。

テイン・セイン大統領は、このような状況下で、「この巨大ダム建設は国民の意思に反している」と、工事の中断を開催中の国会で表明した。中国側は、テイン・セイン大統領のミッソンドム建設中断表明を受けて、ミャンマー政府に、「中国企業の正当な権益を保障する」よう求めた。

3. ミャンマー北部で、政府軍とカチン独立軍の武力衝突発生。難民が中国に逃げ込む。

2月初旬、カチン州でミャンマー政府軍とカチン独立軍の武力闘争が発生した。カチン族の住民約1万人が、紛争を避け、国境を越えて中国側になだれ込んだ。中国側は、2009年度に起きたミャンマーのコーカン族の越境難民のときと同様に、人道的な見地から、ひとまず追い返すことはせず、事態を静観している。この地域に住んでいる少数民族は、ミャンマー側、中国側ともに同族であり、国境の往来も比較的自由である。したがって中国側も事態が収まれば、カチン族難民も、コーカン族のときと同じく、帰郷するであろうと考えているようである。ただし避難場所には、テントや飲み水などが不足しており、伝染病などの発生が懸念されている。なお、コーカン族難民のときには、立派なテントを始めとして、難民収容施設が完備していた。今回は難民がカチン族であり、なおかつダム建設問題がからんでいるため、中国側の対応も複雑なようである。

数年前から、ミャンマー政府は少数民族の武装軍を、国境管理軍に再編する政策を強力に進めている。しかし少数民族側にとってみれば、それは武装解除にも近いことなので、なかなか受け入れられるものではなかった。コーカン族との戦闘もそれが理由の一つであった。今回の戦闘も、ミャンマー政府軍がカチン独立軍に、国境管理軍への編入を迫ったことにも一因がある。またミャンマー政府軍とカチン独立軍との間には、テイン・セイン大統領の中止発言にもかかわらず、ダム建設を巡っての対立が続いており、この地域での権益争いが新たに火種となったのである。

ミャンマー北部のカチン州は、翡翠、ルビー、金、材木などの資源が豊富な地域である。カチン州と国境を接する中国の雲南省瑞麗市側には、立派な宝石観光園がある。そこはこれらの宝石を、小川で砂金取りのような格好で掬うことを売り物にしており、その観光園には毎日多くの中国人観光客が一攫千金を狙い殺到しているほどである。

ミッソンドム建設途中で、中国側の手で周辺の土が、トラック1000台分ほど、中国に持ち運ばれたという。当然のことながら、その土の中に金や宝石が含まれていたものと思われる。したがってこのプロジェクトが中止されても、当該事業の中国側関連会社には、まったく金銭的被害はないと、地元ではささやかれている。

以上